
ラブカクテルス その13

風雷人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ラブカクテルス その1-3

【ISBN】

N8920C

【作者名】

風雷人

【あらすじ】

今宵は少しエッチな香りのカクテル?を用意いたしてみました。
ご賞味あれ。

いらっしゃいます。
どうぞこちらへ。

本日はいかがなさいますか？

甘い香りのバイオレットフイズ？

それとも、危険な香りのテキーラサンライズ？
はたまた、大人の香りのマティニー？

わかりました。本日のスペシャルですね。

少々お待ちください。

本日のカクテルの名前は官能メールでござります。

「じゅつくづじゅつべ」。

私は売れ頃が過ぎた女。

O-Lをしていたこともあつたが、今は飲み屋のホステスさん。
お酒がタダで飲めるし、気楽だし。

気楽？ そうでもない。いくらお酒が好きでも愛想を振り撒き、酔つ
払いの相手をしている歳じゃない。本当は。

周りは先に幸せ掴んで逃げていったし、妥協したのが正解？
そうなのかもしない。

私もこの歳でこんな飲み屋にしがみついているからツキも離れると
か言われるし、若い子なんかにはオツボネ様扱い。
やつてられない。

私だつて昔は男が寄つて來たし、からかい半分、本気半分でハレタ
ホレタもあつた。でも今は男にもて遊ばれただけだつて氣付いた。

みんなこの歳になつてみればわかる。

ブランドに溺れ、博打に溺れ、男に溺れ。

お金を貯めてるおりこうさんなんかはほとんどいない。

そんなのは天然記念物。私もそんな風に生きていれば今頃は。まつ、過去を振り返つてみても何にもならないつて。そんなのはわかつちやいるけどなんとやらだ。

それでこの頃の私はといつと、人生がこんなになつた腹いせに、男たちにある種の罠を仕掛けることに凝つている。

飲み屋に来る、家族もいるだらう、恋人もいるだらう男どもに。

彼らは鴨。私のかわいい鴨ちゃんだ。

私には、今店に行つても指名つてものがなくなつた。

確かに周りのかわいいキャピキャピの子ほうがいいのだらう。

でも、そんな彼女らの指名が重なつたときのヘルプや、忙しいときに入る、初めてのお客の対応など、私はそれなりにあつひこちと忙しかつた。

そんな中で、私は必ず名刺を渡す。

一応こっちのアドレスを書いているが、デタラメだ。

そして、こっちにその気があるように見せかけて、相手のアドレスと電話番号を聞き出す。

これで一丁上がり。

私はそれを家に持つて帰り、自分のパソコンの中に落とす。

そのファイルがわたしの楽しみも元となる。

電話番号はあまり利用価値がないのである程度はポイだ。アドレスが肝心なのだ。

私はあるサイトに登録している。それは出会い系サイトである。かといって、今更そんなところで相手を探そうと言つわけではない。

そのアドレスを使って男どもを誘い、このサイトにアクセスするための利用チケットのポイントを買わせるのだ。
もちろん嘘の出会い系であるが。

そこでは、私は男を誘うのに色々な女に化ける。それがとても面白く、しかもそつとは知らない男たちが必死になればなるほど、私は快感を覚える。

しかも、男たちが、サイト利用のチケットのポイントを購入するたびに私にもポイントがお金となつて換金されて銀行の口座へ振り込まれた。

至れり尽くせりとはいうことを見つのだろ。男どもは何だかかんだ言つても、下心のための出会いしか求めてないし、そんなんで騙されたつて同情なんてしゃしない。いいキ!!だ。

そして今夜も新しいアドレスを手に入れた私は、忙しい時間が過ぎたのを見計らつて、店を出た。

男は40歳位のどう見ても、妻子持ちのサラリーマン。冴えない感じの万年課長といふところか。

男は私がいつものように甘い声で褒め殺し、恼ましい態度で寄り添つて、お酒をねだった後にアドレスを聞くと、鼻の下を伸ばして携帯をいじりながら教えてくれた。簡単簡単。

私は早速そのアドレスをパソコンに入れ、サイトに登録した。

さて、この男はどんな女が好みなのか。きっとあんなスケベおやじ、大してこだわりもなく、なんでも食いついてくるだろ。楽勝樂勝。私はいつものように、とりあえず間違いを装ったメールを送り、内容も一人暮らしの寂しさを誰かに訴えるようなものにした。

私はパソコンのエンターキーを軽快に、食いつけつ、と勢いよく叩いた。

きっと明日には、昨日会った時は違う紳士を演じて私にメールを

送つてくるだらう。

下心ありありで。

私は明け方に近い時間になつてゐるのに気付き、パソコンを閉じた。

しかし、あの男からのメールは一向に来なかつたのだった。
私は首を傾げた。

おかしい。普通であれば、何らかの返信が必ずくるはずなんだが。
大体多いのは、誰かとお間違いでメールが私に来ていましたが、お話
の内容から、あなたを放つて置けなくなりました。僕で良ければお
話相手になりますが。

といつた紳士風の男。そんなのは結構簡単に引っかかる。
或いは、架空の相手からのメールなのにそにになりきつて返信して
くるやつ。

これもイチコロ。でも返信がないなんて、相当な眞面目人間か？
そんなことはない。飲み屋に來ていたあの男のことだ。眞面目な訳
がない。

それならきっと、好みのタイプが違うのだろう。

少し時間を空けて違うタイプの女でメールを打つことに作戦をつつ
した。

私はうつすらとした男の顔を、なんとか思い返した。
その顔にあつた女。

そうだ。きっと女子校生みたいな若いのじゃないだろうか。軽い乗
りのブルセラ援交辺りで。

私は早速、素敵なおじさま作戦でメールを送つた。

今ヨー暇してるんだけどおー、偶然送つたこのメールのお相手が
素敵なおじさまだったー、会つてみたいしー。みたいなー。
自分で打つていてイライラする内容だったが、我慢我慢。
喰らい付けっ。私はエンターキーを打ち放つた。

これならどうだ。

しかし、しばらくしても返信はなかつた。

私はあまり気にせずに次の女になつた。

今度は人妻でいくことにした。

それも退屈な生活を送つてゐる団地妻辺りだ。

いつも家事に追われて平凡な毎日。

刺激が欲しい今日この頃。主人ともご無沙汰。人肌恋しい。

これでどうだつ。喰いつけつ。エンターキーが少し黒ずんで見えた。
しかし今回もまた、返信は来なかつた。

私は少し考えた。そうだ、きっとあいつの趣味は変態女。それしかない。

私はもう、思い返してもなかなか出て来なくなつてきた男の顔を無理くり想像して、イメージを開始した。

どこかのサイトで確か、貴方のコメントを読んだわ。

もし、よかつたらお外とか、車の中とかでチョメチョメしない?

喰らいつけつ。

エンターキーがいつもより重く感じた。

しかしながら返信はなかつた。

私は誓つた。必ずやあの男を振り向かしてみせると。

それ以来私はなるべく時間を作つてメールにのめり込んだ。
店にもあまり行かなくなつたし、お酒も口にしなくなつた。
あの男をとりあえず誘い出すことだけに集中した。

そして、私は色々な女になつた。

欲求不満の看護婦。

売れないモデル。海外ばかりに行つていて、たまに帰つて来たスチュワーデス。

思いつきり病弱な肌の白い女の子。はたまた短気な女王様。金髪のグラマー外人。今流行りのコスチューム娘や、メイド。とてもお金持ちのお嬢様や奥様。

しかし、これだけ毎日送つても、何一つ返信はなかつた。

私は頭を抱えた。そして思いついた。もしかしてあの男はゲイではないのか？

きっとそうだ。

私はもう、冷静さを失つていた。

私はかなり無理がある、男になつたメールを送つた。
しかしど当たり前の如く、返信は来なかつた。

パソコンのエンターキーはヘトヘトになつていた。

私は天井をボーと眺めてた。

そして次の瞬間、想像力の全てを、私の女としての人生に掛けて集中させたのだつた。

後はあるの手しかない。かなりの禁じ手だが、そんなことを気にしている場合ではなかつた。

そしてその禁じ手とは電話番号の記載だつた。

今回私は偽名を名乗り、あれこれと女を演じずに一人のキャラクターとして攻めに出た。

始めは大人っぽく、そして大胆に挨拶を交すようにメールを送り、当然返信がないと判断すると今度は、

私じゃ駄目ですか？せっかく勇気を出して送つたのに。の半泣きメール。

まだまだ終わらない。これからこれから。

次はいよいよ電話番号を載せて、

これで信用してもらえると思うんだけど。攻撃。

すかさず間を与えずに、

こんな大胆なのは駄目ですか？そして、次にメールもらえなかつたら死んじゃいます。それでも駄目なら、

けなしにかかるて、

男のくせに意氣地無し。この役立たず。

それでも駄目なら…。

いや、先生。さすがにいやらしい話を書かせたら右に出る者はいないですね。

今回のシリーズは、前の短編の官能小説よりリアルでいいですよ。

その調子で今後とも我がエロエロ出版をお願いいたしますよ。

しかし先生はどうしてこんなに女人の目線で物語が書けるのか不思議ですね。

いや、この頃エッチな神様からメールが届くのだよ。私にこんな話はいかがってね。いそがしくて飲みに行く暇もないな。

また、先生つたら「冗談を。ははははは」。

おしまい。

いかがでしたか？

今日のオススメのカクテルの味は。

またのご来店、心よりお待ち申し上げております。では。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8920c/>

ラブカクテルス その13

2010年11月3日02時02分発行